

# こころの未来研究センター滞在記 ～感謝の旅～

ビナイ・ノラサクンキット (日本学術振興会研究員、ミネソタ州立大学心理学部准教授)  
Vinai NORASAKKUNKIT

## こころの未来研究センターで 新しい研究を展開

私が初めてこころの未来研究センターを訪れたのは、2007年12月、内田由紀子博士（現・こころの未来研究センター准教授）に招かれて日本人の若者の精神的健康に関する講演を行ったときだった。私はそのとき、こころの未来研究センターの学際的で独創的なビジョンを知った。こころの未来研究センターのミッションの中で最も魅力的だったのは、現実社会で今まさに起こっている問題の解決のためにこころや意識に関する研究を拡張していくことを目指し、異なる学問分野の考え方を引きあわせて心理・社会的な問題についての研究を進めていこうとする、その発想だった。

まさにその12月のころ、グローバル化の進展とともに世界で急速に起こりつつある変化を理解する上で、私は自分の専門分野である文化心理学のスタンダードな研究方法に限界を感じ始めていた。私の同僚であり共同研究者であるこころの未来研究センターの内田准教授、そしてセンター長の吉川教授は、グローバル化が日本の若者に与える心理的影響について調べる新たな文化心理学的研究を進めることについて、深く賛同してくれた。こころの未来研究センターの時機を捉えたミッションとビジョンに触れ、私はこころの未来研究センターこそこの新しい研究を進めるのに最も適



2011年春、稲盛財団記念館前の鴨川沿いで花見

した場所だと感じた。

翌年の夏をこころの未来研究センターで過ごすことができるように、2007年のワークショップを終えてすぐに私は日本学術振興会のサマーフェローシップに応募することにしました。そうしたところ、幸運とセンターの全面的サポートのおかげで、フェローシップを獲得するという恩恵を得ることができた。同時に、こころの未来研究センターでも若者の精神的健康についてのプロジェクトが発足し、連携研究員としてそこでの研究費を得ることができるようになった。こうしたサポートのもと、私は2008年の夏をこころの未来研究センターで過ごし、内田准教授とともに日本の中で主流から取り残された若者たちの動機付けに関する研究を行うことができた。さらにその夏の研

究成果が現れ、新たに1年間の滞在が可能になる長期のフェローシップに応募する機会を与えられた。私は再びセンターの全面的支援を受け、ミネソタにある本務校から2年間の研究休暇を与えられ、2009年9月からこころの未来研究センターでの研究に集中することができた。

## 才能と学術研究を 最大限に発揮させる環境

こころの未来研究センターで過ごしたその2年間の時間は、とにかく実り多く、ワクワクと奮い立たせてくれるものであった。同時に私を謙虚にし、学ぶこと多く、そして非常に刺激的であった。内田准教授とのプロジェクトは多様な研究に発展し、多くの論文・講演・研究発表に

つながったが、それだけではない。それは、内田准教授や吉川教授をはじめとする、こころの未来研究センターを構成する全研究者の偉大な知性（そして同時に全員が持つ誠実さ）と関わることで、そしてそうした人々に囲まれることへの純粹なる畏敬の念であった。そうした人々の多くが、非常に誇らしいことに、今や私の友人なのである。こころの未来研究センターの人々から得た支援、ぬくもり、そして親切は、感謝してもしきれない。また、彼らが常に議論を交わし、互いに建設的なフィードバックを与え合う様子が、私は大好きだった。皆それぞれの専門領域における先端的研究者たちなので、彼らがどれほど洞察に満ちていようと驚くべきではないのかもしれないが、それでもなお皆が非常に熱心に意見を交わし合っているのを見る度に刺激を受け、感銘を受けた。こころの未来研究センターの事務の方々も信じられないほどに勤勉で、しかも気持ちの良い人たちだった。私はいつも、こころの未来研究センターは人々の才能を、そして学術研究を、最大限に発揮させる環境であると感じていた。

さらに、数えきれないほど多くのカンファレンス、また、世界トップクラスの研究者による招待講演の

数々もセンターの主催で開かれたが、これも特筆に値するものだった。私が論文や本を通じて知り、そして尊敬していた研究者のすべてが、こころの未来研究センターにこぞってやって来て自分たちの仕事について話しているかのようであった。私はそんな人々と話をする機会さえ得た。こうしたことは、こころの未来研究センターにいて自分か「世界の動向の中心」にいてかのように感じさせた。こうした場面で私が得た興奮は、もはや筆舌に尽くし難いものであった。

こうした刺激的な経験に加えて、こころの未来研究センターにいてさらなる「特典」もあった。それは、学会やワークショップへの参加を通じて様々な地を訪問できたことだ。そうした中にはバリ島でのフィールド調査への参加も含まれる。それは非常にエキゾチックかつ学ぶことの多い経験で、そこで見たこと学んだことを私はこの先何年もの間考え続けることになるだろう。



福井県立藤島高等学校での講演  
(日本学術振興会サイエンス・ダイアログ事業)

また、こころの未来研究センターから調査に参加した他の研究者たちと知り合うことができたこともとても素晴らしいことだった。私は彼らと友人になれただけでなく、こうした機会がなければ会うこともなかった人々と共同研究を始めることさえできたのである。

### いくつもの感謝を

こころの未来研究センターを去ることになったとき、私はいくばくかの悲しみをおぼえた。しかし、私がそのときもっと強く感じ、そしてこの先も間違いなく抱き続けることになる思いは、「感謝」だった。こころの未来研究センターのおかげで私に与えられた機会に感謝を。こころの未来研究センターのおかげで現在の研究ができる自分になれたことに感謝を。新しくできた共同研究のつながりや友情に感謝を。私の目を開かせ、多くを学ばせてくれたすべての経験に感謝を。こころの未来研究センターが私に寄せてくれた信頼に感謝を。2年以上ものあいだ、夢のような街・京都に住むことができたことに感謝を。そして、私に大きな誇りと喜びを与えてくれた研究者コミュニティの一員でいられたことに、感謝を。

(翻訳：竹村幸祐)



鴨川沿いにてサイクリング